人権コラム　心、豊かに

相互理解を深めるコミュニケーション

近年のコミュニケーションスタイルは、次のように変化しています。①自分のタイミングで発信・確認が可能なメールや SNS によるやりとりが主流（時間と場所の制約からの解放）②短文や動画による直感的な意思疎通が好まれる傾向（文字や言葉より視覚・感情へ）③深い会話をせずとも緩く繋がっている感覚を得るスタイルの定着（繋がりの変化）④丁寧なメールや対面を重んじる一方で、電話に苦手意識を持つ人の増加（伝達嗜好（でんたつしこう）の差）

デジタル化の進展やコロナ禍が「世代間・環境によるギャップ」を拡大させ、このような変化をもたらしました。

このスタイルの変化は「先輩と後輩」の関係性にも及んでいます。後輩が上司や先輩から学び、時には叱責を受けるような上下関係が社会的にも認識されていましたが、近年は、先輩が後輩を尊重したうえで、多様な個性や特徴を重んじる「フラットで対等なパートナー」という関係性にシフトしています。

多様性を重視したコミュニケーションスタイルは、他者の特徴を個性として認め合い尊重し、「自分の常識は、相手の非常識かもしれない」という前提に立つことが出発点となります。その時代、その瞬間において良かれと思って取った行動の裏に、押し付けや決めつけがあったのでは?と振り返ることも必要です。

「上手に付き合う」ことを否定する人はいないはずです。社会や環境の変化に合わせて、試行錯誤を繰り返したり、他者の文化や価値観に興味を示したりしながら、「お互いにとってのベスト」を探り出すことが求められています。

「広報ひた」　令和８年６月号掲載